

昭和56年度 電源立地地域温排水対策事業調査 (要 約)

能登谷正浩・足助 光久・沢田 満・尾坂 康・山口 伸治

本調査は東北電力並びに東京電力により原子力発電所の建設が予定されている下北郡東通村白糠及び小田野沢の前面海域について、海藻類の植生、有用水産動物(アワビ・ウニ・ホヤ)の分布状況を把握すると共に、磯根漁業の実態、海底形状、底質等を把握し、当該海域に於ける水産資源の有効利用に資することを目的としたものである。昭和56年度の調査結果を要約すると以下のとおりである。

1. 白糠、小田野沢に於ける磯根漁業の状況

本地区は下北半島の太平洋岸に位置し、ほぼ直線的な海岸線である。等深線は海岸に平行で等間隔となっており、海底勾配は緩やかである。底質は概ね細粒砂で淘汰度が良く、白糠、小田野沢漁港周辺、老部川河口北側には岩盤が存在する。白糠、小田野沢両漁協の経営体数は昭和55年にそれぞれ560、220で、漸増傾向にある。両組合に於ける磯根漁業の対象種はマコンブ、ワカメ、フクロフノリ、エゾツノマタ、エゾアワビ、キタムラサキウニ、エゾバフンウニ、マボヤ等である。これらのうち漁獲金額の大きなものはマコンブ、エゾアワビ、キタムラサキウニで、昭和55年の両組合の合計水揚げはそれぞれ22,911、126,212、8,853千円となっている。これらの磯根漁業は水深約15m以浅で行なわれているが、マボヤについては組合自営事業として潜水器により水深20m位まで採取されている。

2. 海藻類および有用底棲動物の分布状況

白糠～小田野沢にかけての沿岸約12km、沖出し1.5kmの海域について17線の調査線を設定し、各調査線の距岸0.5、1、1.5kmの各地点、合計51地点においてスキューバ潜水による海藻、動物各1㎡の枠取り採集を実施した。

調査は昭和55年10月および56年3月の2回実施し、出現種の同定、比較を行なった。

海藻類については第1回目の調査で、緑藻3属3種、褐藻5属5種、紅藻10属10種の計18属18種、第2回目の調査ではそれぞれ2属2種、8属8種、26属31種、海産顕花植物1種の計37属42種が得られ、第1回目に比べ紅藻の増加が見られた。主な海藻はマコンブ、アナメ、ハブタエノリ、スズシロノリ等であり、第2回目調査で増えた種としては、アカバギンナンソウ、ツノマタ、ダルス、ヌメハノリ等で、これらは冬～春に発芽、生長するものである。

動物では第1回目調査で軟体動物2属2種、海綿動物1種、棘皮動物7属8種、原索動物2属2種の計12属13種で、第2回目の調査では軟体動物3属3種、棘皮動物9属9種、原索動物2属2種の計14属14種が得られた。主な動物はエゾアワビ、キタムラサキウニ、マボヤ、ゴカクキンコ等で、季節変化はあまり見られなかった。

詳細については「昭和56年度 電源立地地域温排水対策事業報告書、昭和57年3月、青森県」を参照されたい。